

## 変えよう、見方、考え方を 守ろう、本当に大事なものを 作ろう、新しい世界を

2020年初頭、世界がこれほどコロナの脅威にさらされるとは想像できませんでした。学校は3月から一斉休校になり、進級、卒業、入学といった大きな節目の時に学校で学びあえませんでした。

コロナ感染を広げないため「人と接しない、つながらない」ことが最重要視され、誰かと顔を合わせることもはばかられ、障害のある子どもに感染させたら命にかかわるような事態になるかもしれないと悩みました。多くの子どもたちも私たちと同じような「つなげられない」不安を抱いていたと思います。

しかし子どもたちは黙ってこの事態を受け入れてはいませんでした。桜の舞う頃、部活動の友達同士が、適度な距離を取りつつも黙々と走っていたのでした。試合や公演などを含め部活動のその後のことが何もわからない。感染のことも勉強のこともあるけれども、今すべきことは何か、よくよく考えて行動を起こしたのだと思いました。

教職員も悩みつつも、生徒とつながるために何ができるかを考え、手紙をはじめ、オンラインでの対話や授業など、様々な工夫をしてコミュニケーションをとる日々が続きました。

やがて分散登校が始まり生徒が登校してくると、感染に気をつけつつもみんな笑顔で挨拶を交わしていました。人数が少ないので、校内もスクールバスもゆとりがあり、友だちとも先生ともゆったりと話すことができました。「ゆとりのある学校は、やはりいいな」と生徒も教職員も実感したものです。

今までの学校は一体何だったのでしょうか。狭い学校、少ない教室、満員のスクールバス、日々時間に追い立てられ進む学習。コロナ問題に直面し、文科省はICTの活用による学習保障を強く求めましたが、修学旅行や文化祭、体育大会など学校行事については後回しの上、各学校の責任での対応を求めるのみ。部活動に打ち込んできた生徒にとって、試合や発表の場がなくなることは、たいへんつらいことでした。

大切なことは、「9月入学」「学校再開時期」などの問題で署名、申し入れなどで、生徒自身がさまざまな意見表明、行動を開始したことです。また各校で行事について何度も計画を練り直したり、部活動の発表や代替の試合の場を設定したりと、生徒の声が大変、そして学校を動かしてきました。学校以外でも、「#MeToo運動」や「#検察庁法改正案に抗議します」など、小さな声でも次々と賛同者が集まることで大きなうねりとなり、社会全体を動かすことにつながったのです。

私たちは、コロナ問題以前の学校にそのまま戻したいとは思いません。時間的にも空間的にもゆとりがあり、教師や生徒同士がつながり合い、多様な学びをする場であることが、学校の意味であるべきだと、今あらためて確認されたのです。

ともすると国や県からの上意下達での学校運営が進められますが、一人ひとりが顔を合わせつながり、思いに共感し考えを同じくすれば、多くの「つながり」を作れます。ささやくような小さな一人の声に賛同する人が集まり、やがて民主的に社会を変えることができるのです。

「よりよい学校づくり、職場づくり」を議論し、人格の完成をめざす本来の「教育」の実現を追求していきましょう。

2020年10月3日

兵庫県高等学校教職員組合 第104回定期大会